

神話の国、出雲

出雲地方と出雲大社は、日本最古の神話に登場しています。物語は、古事記、日本書紀、出雲国風土記など、日本最古の書物に記されています。いずれも 8 世紀初頭に書かれたもので、それよりもはるかに古い起源を持つ口承の物語が記録されています。細かい部分ではテキストが異なることもありますが、共有されている資料の多さには目を見張るものがあります。郷土史という点では、出雲国風土記は特に貴重な資料です。風土記（地域の地理と文化の記述）は古代の国ごとに作られていましたが、ほぼ完全な形で残っているのは出雲の風土記のみです。

須佐之男命は、出雲神話の中心的神のひとりです。須佐之男命は天照大御神の弟です。須佐之男命は天上の世界で大暴れした後、地上界に追放されました。出雲に降り立った須佐之男命は、一組の老夫婦が美しい娘の櫛名田比売を抱いて泣いているのを目にしました。老夫婦に事情を聞くと、八岐大蛇が他の娘を全て食べてしまい、間もなく櫛名田比売を迎えに来るとのことでした。須佐之男命は、櫛名田比売を妻とすることを条件に、この大蛇を退治することを引き受けました。須佐之男命は八岐大蛇を罠にかけ、退治することができました。その後、尾の中から立派な剣を取り出し、天照大御神に捧げました。この剣は後に三種の神器の一つである草薙の剣となります。次に、須佐之男命は新妻のために宮殿を建て、その完成を祝い最初の和歌を詠みました（5-7-5-7-7 の 5 行 31 音）。

出雲大社の御祭神は、須佐之男命の子孫である大国主神です。大国主神は、因幡の素兎の伝承で初めて登場します。大国主神は、八上比売の結婚相手を求める、大勢の兄たちとともに因幡国に向かっていました。末っ子の大国主神は、行列の最後尾で一行の荷物を運ぶ役目を任されていた。道端で、皮を剥がされて苦しそうにしている素兎を見つけました。これは、意地悪な兄たちが素兎を騙して塩水を浴びせたために、素兎が苦しそうにしていたのです。唯一、大国主神が立ち止まって、素兎の傷の治し方を教えてくれました。素兎はお礼を言うと、八上比売は兄たちの誰とも結婚することはないだろうと予言しました。案の定、八上比売は兄たちの求婚を全て断り、大国主神と結婚することを選びました。

これに怒った兄たちは、大国主神に危害を加えようと企てました。大国主神に山で巨大な猪を捕まえるように命じ、そして真っ赤に焼けた大石を斜面に転がして大国主神を焼き殺しました。大国主神の死を知った母は、高天原の神に願い、二人の女神を派遣してもらい、大国主神の火傷を癒し生き返らせました。しかし、兄たちは彼の安住を許さず、死と再生のサイクルが再び繰り返されました。さらなる迫害を恐れて、大国主神は祖先の須佐之男命に助けを求めて、根之堅洲国へ向かいました。

根之堅洲国へ到着したとき大国主神は須佐之男命の娘である須勢理毘売と出会い、すぐに恋に落ちました。しかし、須佐之男命は大国主神を直ぐに助けようとはせず、蛇のいる部屋で寝るなど多くの試練を与えました。ある日、須佐之男命が眠っている間に、大国主神は須佐之男命の髪を大きな柱に巻きつけて脱出を図りました。大国主神は須佐之男命の権威の象徴である剣、弓、琴を手に入れて須勢理毘売と地上の国に帰ろうとしました。須佐之男命は二人を追い掛け、二人に祝福の言葉を贈り、大国主神にこれらの物を使って国を治めるようにと叫びました。

出雲に戻った大国主神は、兄たちを改悛させてこの地を治めるようになりました。大国主神は、土地を改良するために、農業技術の開発に力を注ぎ、やがてこの地を豊葦原瑞穂国と称えられる素晴らしい国土に変貌させました。天上の世界の神々は、この繁栄に注目しました。天照大御神は使者を次々と送り、大国主神に自分の子孫に国土を譲るようお願いしました。協議の末、国譲りに対する感謝の証として大国主神を祀る立派な宮殿を建てることが約束されました。これが出雲大社の創建です。天照大御神は息子の天穗日命に大国主神に仕えるように任命し、以来天穗日命の子孫が代々大国主神の祭祀をお仕えしています。そこから出雲大社の宮司（國造）が輩出されました。天照大御神の孫である瓊瓊杵尊が地上界を統治し、その子孫が日本の皇室となりました。